山陽新聞（夕刊）
2018年（平成30年）7月18日　水曜日

一日一題

行商がゆく⑦深い井戸から見える星影

リゾーム専務　金藤　純子

大病はありませんが、軽い病気は何度かかかりました。数年前の顔面まひは、前日まで舌のしびれ、後頭部の疲労感などを自覚していたにもかかわらず、自身の体力を過信していました。2度目の経験でしたから慌てることはなかったのですが、むしろ病気になった要因である心の問題に行き当たります。最初に連絡した相手は高校の同級生である医師と経営者の2人でした。

顔面まひは顔の半分がぴくりとも動かなくなります。片方のまぶたは開きっ放しで、笑ったり泣いたりすると「ひょっとこ」のお面のような表情になります。まひの2日後、経営者の友人にその妙な顔で泣きながら相談をしたものですから、困ったことでしょう。

しかし友人は私の長い話を黙って聴いた上で「僕にいいアドバイスはできないけれど、周りを恨んではいけないよ」と自分が苦境の時に支えになったという一冊の本を薦めてくれました。ノートルダム清心学園前理事長渡辺和子先生の「置かれた場所で咲きなさい」でした。その中に「深くて暗い井戸の底には、真っ昼間でも、井戸の真上の星影が映っている。井戸が深ければ深いほど、中が暗ければ暗いほど、星影は、はっきり映る。肉眼では見えないものが、見えるというのです」とあります。

職場も家庭も思い通りにはいきません。理不尽に思えることが続く時、「なんで自分はここまで努力しているのに相手はわからないのか」と考えてしまうことがあります。しかし、他人なのですから、答えはいつまでたっても得られません。実は自分の器の大きさがその時はそこまでだったということなのですが、自身の能力以上の事柄や異質な存在に適応できていないという事態を拒んでいるために、ストレスが蓄積し病気という形で知らされる。井戸が教えてくれたのは、自分の器の大きさに気づき、これを大きいものに育て、生まれ変わる自分の未来でした。